

2022年9月25日(日)「その時まで、その時には」

暗唱聖句: 多くの者の救いとなった人々は とこしえに星と輝く。(ダニエル 12:3)

今回でダニエル書は最終回となります。ダニエル物語は、ユダの王ヨヤキムが即位して3年目に、バビロンの王ネブカドネツアルがエルサレムに攻めてきて、ダニエルの他3人の少年をバビロンに連れ去ったことから始まりました。紀元前606年当時少年であったダニエルですが、70年もの年月に亘り活動を続け、4人の王の治世を通して活躍しました。

10章から12章にかけては、ダニエル書の最後の長い幻が展開されています。10章を通して、理解するに困難な言葉がいかにして与えられ、またその言葉の意味を解き明かす幻が、どのようにして授けられたかが描かれています。

11章では、最初ペルシア時代に関する出来事が簡潔に語られ、以下ヘレニズム時代における出来事、特にパレスチナの支配をめぐるセレウコス王朝と、プトレマイオス王朝の激しい争いの歴史が延々と描かれています。そしてこの書き方は黙示文学風の象徴的言葉を使って物語られ、アンティオコス4世の時代の迫害の説明を描いた後、40節から45節にかけて、ダニエル書の著者の時代を越えた先のことについて述べています。この箇所¹の出来事は、歴史的な事実を見いだすことの困難な箇所とされています。

続く今回の聖書箇所12章は、殉教者と背教者の死後の運命が語られ、死者の復活、死後の生についての信仰が正面から記されています。それと共に迫害の終わりの時期に関する預言が、二度三度と変更されながら幻として記されています。

12章1節から4節は、ダニエル書において最も注目すべき箇所であると思います。この箇所では、死者の復活が明瞭に語られ、旧約聖書において来たるべき世についての記述がこれほどまでに描かれている箇所は他にはほとんど見当たりません。

11章45節は、「しかし、ついに彼の終わりの時が来るが、助ける者はない。」という言葉で結ばれていますが、12章1節では、その時イスラエルの守護天使である大天使長ミカエルが立つ、という言葉で始められています。古代中近東の物語では、神と大天使はそれぞれ国を守っていたとされています。ミカエルはイスラエルの守護天使として、ダニエル書10章21節、黙示録12章7節でも語られています。11章の地上の戦いは、苦難の時代における天使たちの天上の戦いの反映とも考えられています。しかしこの戦いが、アンティオコス4世時代のことなのか、将来の出来事なのかは不明とされています。続く「あの書」とは、既出の巻物のこととされていて、7章10節、10章21節にも記されています。その巻物には、神に属す者全てが記されているとされ、それらの人々の善行と悪行が描かれているとされています。

2節に記されている復活の信仰は、迫害という現実の中から生まれてきたものであると考えられています。来たるべき世のいわゆる宗教的、哲学的な考察ではありません。

「多くの者が地の塵の中の眠りから目覚める。」は、「地の塵の中に眠った者の中から多くの者が目覚める。」と訳され、「地の塵」は墓と陰府の両方を意味します。しかし、「多くの者」は、3説の「目覚めた人々」、4節の「多くの者」と同様に必ずしも死んだ者全てではなく、「命の書」(「イザヤ」4章3節、「詩編」69章29節)に記された中の迫害に屈せず、生命をも惜しまなかった人々であろうと思われます。そして「大空の光のように輝き」「とこしえに星と輝く」と記します。従って、「永久に続く恥と憎悪の的」となる者たち、「永遠の命」に入る人々、その中でもさらに「星と輝く」人々の、3つのグループに区別されていると見るのが、本文に忠実であろうと思われるのです。

敬虔な者たちの永遠の命への復活が、迫害の下で殉教を恐れずに信仰を守り通した人々の希望の根拠となったことは、言うまでもないでしょう。迫害の時代においては、律法への忠実は、必ずしも現世での繁栄を伴うものではなかったでしょう。しかし、律法を守って殉教することは「秘儀」の教えとしての「復活信仰」であったのだと思われます。

5 節から 10 節は結びの幻です。5 節、6 節に登場する超自然的な姿をした天使的存在に向かって、ダニエルは語りかけます。ここでの二人の天使的存在は、証人と言われています。律法では、立証のためには二人の証人が必要とされています。（申命記 19 章 15 節）

幻の中では、天使的存在が、終末的歴史が現実に展開される現場にあってそれぞれの役割を果たします。ダニエルは「これらの驚くべきことはいつまで続くのでしょうか」と訊ねます。「驚くべきこと」とは、ここでは耐えがたい迫害の事実を指しているのですが、その厳しい現実と同時に、神の歴史における「くすしきみ業」という意味も担っています。「くすしき」とはこの場合「秘儀」「律法を固く守るさま」と考えられると思います。悪魔的力に対して、信仰者が神への強い信頼のみで立ち向かう時、神の怒りとしての現実が、神の救いへと変わるという逆説的なみ業が展開されます。

7 節で「麻の衣を着た人」が、神に誓って迫害の長さを答えます。そして「聖なる民の力が全く打ち砕かれると、これらの事はすべて成就する。」と言われます。これは、敬虔な信仰者である人々の、全ての力が尽きたいつの日か、まさに絶望をくぐり抜けたその時に希望は全て成就すると言われているのだと思われます。8 節でダニエルが、「こう聞いてもわたしには理解できなかったので、尋ねた」と記されていますが、このように答えることは、人間の可能性をはるかに超えた次元に対しては、当然であろうと思われます。迫害に直面し、単に理性で解釈しようと思っても、次元を超えた現実と、天使的存在の語りかけは、信仰者にとっては閉じられた苦難の秘密であり、ただ歩いていくしかなかったでしょう。神に背いて歩む人々は、歴史の秘儀を何も理解することはできず、神の秘儀に「目覚めた人々」は、不条理と思われる歴史的現実の意味を悟るのでしょうか。

11 節から 13 節は、最後の加筆と言われています。アンティオコス 4 世によるユダヤ教迫害の勅令が出てから 3 年 8 カ月を経て、エルサレム神殿は浄化されるに至ります。11 節で 1290 日すなわち 3 年 7 カ月と記された期間が、12 節では 1335 日、3 年 8 カ月 15 日と変更されています。この数字は、迫害の期間ではなく神殿が浄化されるまでの期間とも、将来のある時期の出来事の期間とも言われています。大切なことは、終わりの時まで主にあって自分の道を歩み、遣わされる場所へと進み出て、いつでも神の前に立つことであるとダニエル書は語っているのだと思います。

最後、90 歳を越えた高齢のダニエルは、約束の地には戻れずバビロンにいますが、13 節で「終わりまでお前の道を行き、憩いに入りなさい。時の終わりにあたり、お前に定められている運命に従って、お前は立ち上がるであろう。」と、慰めの約束を与えられます。

黙示録 1 章 3 節で、ヨハネは「時が迫っている」と語ります。同じく 22 章 10 節でも「時が迫っているからである。」と語ります。ダニエル書（12 章 13 節）で示された難解な神の啓示ですが、黙示文学としての「その時」を、みなさまはどのように考え、待ち望まれますでしょうか。

● 分かち合い

私たちは今、旧約聖書と新約聖書の両方を読むことができます、旧約で示されたことが成就することを知っています。神さまとの出会い、イエスさまとの出会いを聖書から分かち合ってみましょう。

* 黙示文学

この世の終わりに関することを、さまざまな表現を駆使して、写實的、絵画的に描いています。ユダヤ教とキリスト教における関わりを、神の支配と悪霊の破滅の話などを通して、旧約では預言との密接な結び付きについて（「イザヤ書」24 章から 27 章、「ダニエル書」）語り、そして新約では「ヨハネの黙示録」を通して語られています。

(担当：H.I.)